

神女〈なりきよ〉〈むつき〉の素性そせい

内間直仁

一 はじめに

『おもしろさうし』には、神の依り憑く神女として〈なりきよ〉〈むつき〉が現われる。〈なりきよ〉の対語としては〈いけな〉があり、〈むつき〉の対語としては〈さしふ〉があることもよく知られている。これらの神女について『沖繩古語大辞典』（一九九五）では概略次のように解説されている。

なりこ【成り子】

①神が依り憑き、神に成り変わった人。神の依り憑く人。現世の人という意味もある。対語「いけな」。②久高島のイザイホーで神女集団に加入するために成巫儀礼を受けて新たに神女となった三十〜四十一歳の女性の、神女組織上の名称。対語「やぢく」。いけな

現世。目に見える現実の世界の意（不可視の世界に対する）。

現世の人、現実世界の神女の意もある。

もつき【物憑き】

神の憑依する神女。対語「さしふ」。

さしふ

神の憑依する神女。カミンチュ、神がかりする人、即ち神女は神の「さしふ」である。天上の神は特定の神女に憑依して現われる。

この解説で、〈なりきよ〉と〈むつき〉が神の依り憑く人であることはわかる。しかし、もう一步踏み込んで両者はまったく同じ性格の神女なのか、あるいは神の依り憑くという面では共通していても微妙に異なる性格を持つ別個の神女なのか、ということについてはいまひとつ明らかでないところがある。その問題を考察するにあ

たつては、まず〈なりきよ〉と〈むつき〉がオモロでどう謡われているかをきちつと押さえつつ、謡われているオモロ全体の中で分析してみる必要がある。次に、〈なりきよ〉〈むつき〉と深くかかわっているとみられる、いわゆる国語の「なる」「もの」あるいは琉球方言の「ナイン」[nain]（なる。できる）、「ムン」[mun]（もの）の表現の面からも考えてみる必要がある。

本稿では、主としてこの二つの側面から〈なりきよ〉と〈むつき〉の素性にせまってみよう。

二 『おもろさうし』における〈なりきよ〉〈むつき〉

1. 謡われているオモロの分析

『おもろさうし』で謡われている〈なりきよ〉と〈むつき〉については、これまでも言及した論考がいくつかある（玉城一九九一、小山一九九二など）。しかし、いずれも両者の素性そのものについて論じたものではない。そこで改めて『おもろさうし』で〈なりきよ〉〈むつき〉はどう謡われているかについて調べてみることにした。そこで、〈なりきよ〉〈むつき〉のあらわれるすべてのオモロを抽出し、謡われている内容の側面から両者の違いをみてみた。その結果、以下のことが見て取れる。

(1) 「降りる」主体と対象

既に述べたように、〈なりきよ〉〈むつき〉は神の依り憑く神女

神となった高級神女がさらに依り憑いていく下級神女である。その点においては両者は共通しているが、しかしいかなる高級神女が依り憑いていくかという点においては両者は違いを示す。

まず、〈なりきよ〉を対象として「降りる」主体としては、〈きみかなし〉〈せんきみ〉〈あおりやへ〉の神女群がいる。〈きみかなし〉が「降りる」旨を謡ったものとしては、次のオモロなどがある。なお、用例はすべて外間一九九三に負う。下線は筆者。

一 きこゑ、きみかなし／いけな、なり、かわて／しよりもり、
おれわちへ／なさいきよもいに／しまか、いのち、みおや
せ／

又 とよむ、きみかなし／なりきよ、おれかわて／またまもり、
おれわちへ／

又 さしふ、五ころに／すへとめて、おれわちへ／

又 むつき、五ころに／みまふてす、おれたれ／

又 なさいきよもい、あちおそい／およりとて、おれわちへ／

又 あか、かいなて、あちおそい／みまふてす、おれたれ／

又 てるかはか、うさししゆ／このさらに、おれわちへ／

(三三四番)

また、〈せんきみ〉が「降りる」旨を謡ったものとしては、次のオモロがある。

一 きこへ、せんきみきや／なりきよ、おれふさて／

なさいきよもい、わうにせ／せち、まさて、ちよわれ／

又 とよむ、きみ、とよみきや／いけな、おれ、なふちへ／

又 みもん、内の、まみやに／あすで、なふちへ、からわ／

又 かわるめの、まみやに／ほこて、なふちへ、からわ／

又 さしふ、五ころに／おれなふちへ、からわ／

又 むつき、七ころに／みまふてす、おれたれ／

又 しよりもり、ちよわる／あか、なさいきよ、わうにせ／

すゑなかく／せち、まさて、ちよわれ／

又 またま、もり、ちよわる／あか、なさいきよ、わうにせ／

(二一〇番)

三三四番のおモロでは、神となった〈きみかなし〉神女(主体)

が〈なりきよ〉(対象)に天降りし依り憑くと、〈なりきよ〉が

神となり変わって首里杜に天降りしてくる旨が謡われている。二一

〇番のおモロでも、神となった〈せんきみ〉神女が〈なりきよ〉に

憑依し、〈なりきよ〉が神となって首里杜に天降りしてくる旨が謡

われている。また、〈きみかなし〉〈せんきみ〉の両神女は〈むつ

き〉にも「降りる」性格を持つ神女であることがこれらのおモロを

通して見て取れる。

〈あおりやへが〉が「降りる」旨を謡ったものとしては次のおモ

ロがある。

一 きこゑ、あおりやへや／いけな、なりかわて／

しよりもり、おれわちへ／かくら、せち／

あんしおそいに、みおやせ／

又 とよむ、あおりやへや／なりきよ、おれか(か)わて／

またまもり、おれわちへ／ (二五二番)

このおモロでは神となった〈あおりやへ〉神女が〈なりきよ〉に依

り憑いて、〈なりきよ〉がさらに神に「成り変わる」旨が謡われて

いる。

次に、〈むつき〉を対象として「降りる」主体としては、〈きみ

かなし〉〈せんきみ〉〈きこゑ大きみ〉〈おしかけ〉〈しより大きみ〉

〈さすかさ〉の神女群がいる。その中で〈きみかなし〉〈せんきみ〉

は、既に見てきたように〈なりきよ〉にも「降りる」ことになって

いる。

まず、〈きみかなし〉が神となって〈むつき〉に「降りる」旨を

謡ったものとしては、次のおモロがある。

一 きこゑきみかなし／さしふ、おれかわて／

しよりもり、おれわちへ／なさいきよもいしよ／

きみふさて、ちよわれ／

又 とよむきみかなし／むつきおれなおちへ／

またまもりおれわちへ／

又 なさいきよもい、あちおそい／み、まふてす、おれたれ／

又 あか、かいなで、あちおそい／かいなてゝす、おれたれ／

又 てるかはは、のたてゝ／すへとめて、おれわちへ／
 又 てるしのは、のたてゝ／ませとめて、おれわちへ／
 又 なさいきよもい、あちおそい／しよりもりちよわちへ／

おおきみに、しなわ／

(七三三番)

他に、〈きみかなし〉が〈むつき〉の対語〈さしふ五ころ・七ころ〉などに「降りる」旨を謡ったものとしては、三二二番のオモロなどがある。

〈せんきみ〉が神となって〈むつき〉に「降りる」旨を謡ったものとしては次のオモロがある。

一 きこゑ、せんきみきや／すへ、とまへて、おれわちへ／
 あんしおそいに／しまか、いのち、みおやせ／
 又 とよむ、きみ、とよみきや／ませねがて、おれわちへ／
 又 あまみや、から／すゑの、きみやれは／
 又 しねりや、から／あいちへきみやへは／
 又 さしふ、五ころに／みまふてす、おれたれ／
 又 むつき、七ころに／かいなてゝす、おれたれ／
 又 大きみきや、御さうせ／てるかはは、のたてゝ／

(二九七番)

他に、九〇番、六六五番のオモロでも〈むつき〉の対語〈さしふ〉に「降りる」旨が謡われている。

〈きこゑ大きみ〉が同じく神となって〈むつき〉に「降りる」旨

を謡ったものとしては、次のオモロがある。

一 きこゑ大きみきや／さしふ、おれなおちへ／
 あちおそいしよ／
 ともゝすへ／すゑ、まさて、ちよわれ／

又 とよむせたかこか／むつきおれふさて／ (二五〇番)

他に、〈きこゑ大きみ〉が〈むつき〉やその対語〈さしふ〉〈さしふてるくも・てるきしやけ〉〈さしふ五ころ・七ころ〉などに「降りる」旨を謡ったものとしては、一六番、九四番、一〇七番、六九五番などのオモロがある。

〈おしかけ〉が〈むつき〉の対語〈さしふ〉に「降りる」旨を謡ったものとしては、次のオモロがある。

一 きこゑ、おしかけか／しよりもり、おれわちへ／
 きみつほに／おきやかもいに、みおやせ／
 又 きみの、にせとのか／またまもりおれわちへ／
 又 さしふ五ころに／おれなふちへ、からは／
 又 さしふ七ころに／おれふさて、からは／ (六六七番)
 〈しよりもり大きみ〉が〈むつき〉に「降りる」旨を謡ったものとしては、次のオモロがある。

一 しよりもり大きみきや／しよりもり、おれわちへ／
 あんしおそ、いしゆ／せちまさて、ちよわれ／
 又 とよむ、きみとよみきや／ませねがて、おれわちへ／

又 あまみや、から／すへの、きみやれは／

しねりや、から／あいちへ、きみ、やれは／

又 さしふ、五ころに／みまふてす、おれたれ／

又 むつき、七ころに／かいなててす、おれたれ／

又 大きみや、御さうせ／てるかはは、のたて、／

(二九四番)

他に、〈しより大きみ〉が〈むつき〉の対語〈さしふ〉に「降りる」旨を謡ったものとしては、七二四番、七三八番のオモロがある。

〈さすかさ〉が〈むつき〉に「降りる」旨を謡ったものとしては、次のオモロがある。

一 きこへ、さすかさか／さしふ、おれかわて／

ともゝとの、よそう、せち／あんしおそいに、みおやせ／

又 とよむ、さすかさか／むつき、おれなふちへ／

又 けおの内は、おしあけて／しよりもり、おれわちへ／

又 もちる内は、つきあけて／またまもり、おれわちへ／

又 あちおそいよ、ほこて／たたみきよ、ほこて／

(二〇四番)

以上のように、〈なりきよ〉(対語・いけな)と〈むつき〉(対語・さしふ)を対象として「降りる」主体としての高級神女群には違いがみられる。前者を対象とする神女群としては〈きみかなし〉〈せんきみ〉〈あおりやへ〉がいる。又、後者を対象とする神女群

としては〈きみかなし〉〈せんきみ〉〈きこゑ大きみ〉〈おしかけ〉

〈しより大きみ〉〈さすかさ〉がいる。〈きみかなし〉〈せんきみ〉

は、〈なりきよ〉も〈むつき〉も対象として「降りる」が、それ以外

の神女は「降りる」対象が決まっています、例えば〈あおりやへ〉

は〈なりきよ〉を対象とするが、〈むつき〉を対象として「降りる」

と謡ったオモロは見出せない。また〈きこゑ大きみ〉は〈むつき〉

を対象とするが、〈なりきよ〉を対象として「降りる」と謡ったオモロは見出せない。

(2)「降ろす」主体と対象

〈なりきよ〉は、〈きこゑ大きみ〉〈たうの大や〉が神を「降ろす」対象となる。

一 きこゑ大きみや／きらなおちへ／

いけなきみ、よりおるちへ／

あちおそいしよ／せぢ、まさて、ちよわれ／

又 とよむせたかこが／ゑがなおちへ／

なりきよきみ、つきおるちへ／

又 とし七と、させわちへ／しよりもり、よりおるちへ／

又 とし八とせ、ねがて／またまもり、つきおるちへ／

又 いせゑけり、あちおそい／大きみは、のたて、／

又 あが、かいなで、わうにせ／きみきみは、てづて／

又 てるかはが、まぶりよわちへ／みしま、わうにせず、かけ

おそて／

(一〇九番)

このオモロでは、聞得大君が吉日を選んで、〈なりきよ〉に神を依り憑かせる旨が謡われている。他に八八番、六五八番、七二二番、七三五番のオモロにも同様の旨が謡われている。

一 たうの、大や、きこへか／まみや、あすはず、きよらや／

又 いしけなは、きこへる／

又 なりきよ、おろちへ、きこへる／

又 いけな、おろちへ、きくろ／

(七〇〇番)

このオモロでは、久米島堂村の名高い根家の主人が神庭で〈なりきよ〉に神を「降ろして」、美しい神遊びをしている旨が謡われている。〈なりきよ〉に神を「降ろす」主体がこの堂村の主人なのか、あるいはそれなりの神女であるのか、このオモロだけでは明らかでないが、ここではさしあたって堂村の主人としておく。

以上のように、聞得大君や堂の大親は、〈なりきよ〉に神を「降ろして」いるが、〈むつき〉に「降ろす」と謡ったオモロは見出せない。

(3) 「先立てる」主体と対象

〈なりきよ〉は、〈きこゑ大きみ〉〈きみかなし〉が「先立てる」対象となる。

一 きこゑ大きみや／みしま、いのり、おれわちへ／

あちおそいしゆ／かみか、世、ちよわれ／

又 とよむせたかこか／みくに／

又 けらへ、大ころた／あんしおそいに、よしられ／

又 かい、なて、まころた／たゝみきよに、のたてれ／

又 あんしおそいか、おこと／きみきみは、つかい／

又 たゝみきよか、ゑりちよ／ぬしぬしは、つかい／

又 けよ、よせは、あおらちへ／やゝめつら、あおらちへ／

又 いけな、きみ、たてゝ／なりきよ、はな、たてゝ／

又 あかくちやか、よいつき／てたかこち、よそいて／

(七二七番)

このオモロでは、聞得大君が〈なりきよ〉を「先立て」ている旨が謡われている。一一二番のオモロでも聞得大君が〈いけなきみ〉を「先立て」、〈なりきよきみ〉をせきたてている旨が謡われている。

一 きこゑきみかなし／しよりもり、おれわちへ／

かみかみす、うらのかす／いのり、やゑて、よせれ／

又 とよむきみかなし／またまもりおれわちへ／

又 いけなきみ、さきたて／なりきよかみ、いくまちへ／

又 てるかはす／世のむすひ、つきおろせ／

又 てるしのす／きみか、くき、さし、よわれ／

又 しよりもり、おやのろ／なよかさの、おやのろ／

又 かねもりの、おやのろ／みせりきよの、おやのろ／

又 にしもりの、おやのろ／なよくららの、おやのろ／

又 ゑそこ、かよわ、きやめ／

あちおそいしよ／世しり、よわれ／

かみかみす、うらのかす／いのりやゑて、よせれ／

(三三三番)

このオモロでは、〈きみかなし〉が〈いけなきみ〉を「先立て」て、
〈なりきよかみ〉をせきたてている旨が謡われている。

以上のように、聞得大君や〈きみかなし〉は〈なりきよ〉を
「先立てる」が、〈むつき〉を「先立てる」と謡ったオモロは見出
せない。

(4)「集め・揃える」主体と対象

〈なりきよ〉は、聞得大君が「集め・揃える」対象となる。

一 きこゑ大ききや／さしふ、おれなおちへ／

あちおそいしよ／ともゝすゑ／すへまさて、ちよわれ／

又 とよむせたかこか／むつきおれふさて／

又 いけな、きみ、あとへて／なりきよ、そろへて／

又 あんしおそいきや、おこと／わうにせか、おこと／

又 とし八とせ、なるきやめ／ゑか、八とせなる、きやめ／

又 きみてつり、まとうさ／みものあすひ、まとうさ／

又 大ころた、あとへて／もりやへこた、そろへて／

又 きみ、いきよい、けにあれ／かみ、つかい、たに、あれ／

又 あかくちやか、よいつき／てた、かみたち、とよて／

又 てるかはむ、ほこて／いちころむ、ほこて／(七四〇番)

このオモロでは、聞得大君が〈いけな・なりきよ〉を「集め・揃え
て」いる旨が謡われている。六九四番のオモロでも聞得大君が天降
りして〈いけな・なりきよ〉を「集め・揃えて」いる旨が謡われて
いる。

一方〈むつき〉を「集め・揃える」対象として謡ったオモロは見
出せない。

(5)「迎える」主体と対象

〈なりきよ〉は、〈あちおそい(国王)〉が「迎える」対象とな
る。

一 きこゑ大ききや／けよの、うちは、おしあけて／

しよりもり、おれわちへ／ともゝとの、世そう、せち／

あんしおそいに、みおやせ／

又 とよむせたかこか／もちろんちは、つきあけて／

またまもり、おれわちへ／

又 なさいきよもい、あちおそい／いけなきみ、いきよわ／

又 あか、かいなて、あんしおそい／なりきよきみ、いきよわ／

又 てるかはか／かいなて、よわる、あんしおそい／

又 てるのか／まふりよわる、あんしおそい／

又 あちおそいや、いみやからと／すゑまさて、ちよわる／

(二六〇番)

このオモロでは、国王がへいけなきみ・なりきよきみを「いきよわ（お迎えなさってほしい）」と謡っている。

一方、〈むつき〉を「迎える」対象として謡ったものは見出せない。

(6)「珍らがる・掻い撫でる」主体と対象

〈むつき〉は、へきこゑ大きみへしより大きみへせんきみへきみのつんしが「珍らがる（愛でる）・掻い撫でる（慈しむ）」対象となる。

一 きこゑ大きみきや／いへの、いのり、しよわちへ／
 あちおそいきや、およりとて／おほつより、かゑら／
 又 とよむせたかこか／つかさ、いのり、しよわちへ／
 又 あけとまか、たては／てるかはす、みまふれ／
 又 よすつめか、たては／きみきみす、みまふれ／
 又 さしふ、てるまもの／かいてゝす、おれたれ／
 又 むつき、てるきしやき／かいてゝす、おれたれ／
 又 ゑか、なんか、あすて／あまこ、あわちへ、からは／
 又 よる、なんか、あすて／みきやう、あわちへ、からは／
 又 くとよみ、あおらちへ／みものより、めつらしや／
 又 くに、めつら、あおらちへ／やの、あすひ、めつらしや／
 又 さに、しらぬ、ころころ／こむて、あわちへ、てつて／
 又 かす、しらぬ、まころた／みそて、あわちへ、てつて／

又 いつこ、しま、なおちへ／このみしま、なおちへ／

このオモロでは、聞得大君がへさしふ・むつきを「慈しんで」、天降りしている旨が謡われている。

(三六七番)

一 しより、大きみきや／首里もり、おれわちへ／
 あちおそいしよ／せぢ、まさて、ちよわれ／
 又 とよむ、きみ、とよみきや／ませながて、おれわちへ／
 又 あまみやから／すへの、きみ、やれは／
 又 しねりやから／あいちへ、きみ、やれは／
 又 さしふ、五ころに／みまふてす、おれたれ／
 又 むつき、七ころに／かいてゝす、おれたれ／
 又 大きみきや、御さうせ／てるかはは、のたてゝ／

このオモロでは、首里大君がへさしふ・むつきを「慈しんで」、天降りしている旨が謡われている。

一 きこゑ、せんきみきや／すゑ、とまいて、おれわちへ／
 あちおそいに／嶋か、のち、みおやせ／
 又 とよむ、きみ、とよみきや／ませ、ながて、おれわちへ／
 又 あまみやから／すへの、きみ、やれは／
 又 しねりやから／あいちへきみやれは／
 又 さしふ、五ころに／みまふてす、おれたれ／

(二〇八番)

又 むつき、七ころに／かいなてゝす、おれたれ／
又 大きみきや、御さうせ／てるかはは、のたてゝ／

(二二一番)

このオモロでは、〈せんきみ(精の君)〉が〈さしふ・むつき〉を
「慈しんで」、天降りしている旨が謡われている。

一 きこゑ、きみの、つんし／とよむ、きみの、わう／

みしま、おれなおせ／

又 まもんうちの、みうちに／あかる、うち、あかりや／

又 あさとらは、まやへて／ようとはは、さりよく／

又 さしふ、めつらかて／むつき、かいなてわちへ／

又 なさいきよもい、のたてゝ／あちおそいは、いので／

又 おしあけ、とし、よりおれや／なおり、とし、よりおれや／

又 大きみきや、もちなし／せたかこか、ひきなし／

くのに、ねは、しなて／おこと、あわしよわちへ／

又 いっこ、あか、なよわちへ／くはら、やし、なよわちへ／

みしま、おれなおちへ／ (三四四番)

このオモロでは、〈きみのつんし(君の頂)〉が〈さしふ・むつき〉
を「愛で慈しんで」、天降りしている旨が謡われている。

一方、〈いけな・なりきよ〉を「珍がる・掻い撫でる」対象とし
て謡ったオモロは見出せない。

(7)「助ける」主体と対象

〈むつき〉の対語〈さしふ〉は、〈もゝとふみあかり(百度踏み
揚がり)〉が「助ける」対象となる。

一 もゝと、ふみあかりや／てにち、よためかちへ／

あまならちへ／さしふ、たすけ、わちへ／

又 きみのふみあかりや／

又 けおのゆかるひに／

又 けおのきやかるひに／ (三四三番)

一方、〈いけな・なりきよ〉を「助ける」対象として謡ったオモ
ロは見出せない。

(8)「おしかかる」主体と対象

〈むつき〉の対語〈さしふ〉は、〈わらいきよ(笑い子)〉神女
が「おしかかる(神かかりする)」対象となる。

一 きこゑおしかさか／やちよく、たにしらせ／

わらいきよ／さしふ、おしかかて／

又 とよむおしかさか／ (七一七番)

このオモロだけでは、押笠神女、やちよくた(村頭の妻女。神事
に補佐をつとめる)、笑い子の三者と〈さしふ〉の関係がまだよく
つかめないが、下線部分は「笑い子神女がさしふに神がかりして」
と解した。すなわち、笑い子神女が〈さしふ〉に「おしかかる」と
みた。

一方、〈いけな・なりきよ〉を「おしかかる」対象として謡ったオモロは見出せない。

(9)「ねがう・このむ」主体と対象

〈むつき〉の対語〈さしふ〉は、聞得大君が「ねがう(望む)・

このむ(目論む、企てる)」対象となる。

一 きこゑ、大きみや／あまみや、ゑか、とりよわちへ／

なさいきよもしよ／くにとよでちよわれ／

又 とよむせたかこか／しねりやゑか、とりよわちへ／

又 さしふ、五ころに／ねかいわちへ、よりおれて／

又 さしふ、七ころに／このみ、よわちへ、つきおれて／

(以下略)

(二〇七番)

このオモロでは、聞得大君が〈さしふ五ころ・七ころ〉に、あらかじめ望み、目論んで天降りしている旨が謡われている。

一方、〈いけな・なりきよ〉にはそのように謡われたものは見出せない。

(10)「てるかはがうざし」と関係

〈むつき〉の対語〈さしふ〉は、「てるかはがうざし(日神の御

命令)」と深くかかわっている。

一 きこゑ、せのきみや／すゑ、とめて、おれわちへ／

いみや、からど／おれなおちへ、あすぶ／

又 とよむ、くに、とよみ／ませ、ねがて、おれわちへ／

いみやからと／

又 首里もり、ちよわる／ゑぞにや、すゑ、あちおそい／

いみやからど／

又 まだま、もり、ちよわる／てだか、ませ、うきゆくも／

いみや、からと／

又 とし、七と／おぼつ、だけおきつめ／いみや、からど／

又 ゑが、八とせ／しよりもり、まどうさ／いみや、からど／

又 てるかはが、うざし／さしふ、おれなおちへ／

いみやからど／おれなおちへ、あすぶ／ (九〇番)

このオモロでは、精の君神女が日神の御命令で〈むつき〉の対語〈さしふ〉に降りて神遊びをする旨が謡われている。

〈さしふ・むつき〉が「てるかはがうざし、てだがおざし」(太陽神の御命令)と深くかかわっていることは、次のオモロなどからも理解される。

一 きこゑ大君みや／あまみや、ゑか、とりよわちへ／

なさいきよもしよ／くにとよでちよわれ／

又 とよむせたかこか／しねりやゑか、とりよわちへ／

又 さしふ、五ころに／ねかいわちへ、よりおれて／

又 さしふ、七ころに／このみ、よわちへ、つきおれて／

(中略)

又 てだが、おざしやれば／首里もり、ふさて／

なさいきよもいしよ／くにとよで、ちよわれ／(一〇七番)

一 しよりもり、ちよわる／世そうせち、もち、よわちゑ／

てるかはす、まぶて／よは、ちよわれ／

又 まだまもり、ちよわる／

又 てるくもに、しられ／

又 おそて、とゞ、やけれ／

又 さし、ふてるくもに／

又 もつき、てる、まもん／

(中略)

又 てるかはか、うさししよ／

(二三一番)

一 きこゑ、きみかなし／いけな、なり、かわて／

しよりもり、おれわちへ／なさいきよもいに／

しまか、いのち、みおやせ／

又 とよむきみなし／なりきよ、おれかわて／

まだまもり、おれわちへ／

又 さしふ、五ころに／すへとめて、おれわちへ／

又 むつき、五ころに／みまふてす、おれたれ／

又 なさいきよもい、あちおそい／およりとて、おれわちへ／

又 あか、かいなで、あちおそい／みまふてす、おれたれ／

又 てるかはか、うさししゆ／このきらに、おれわちへ／

(三三四番)

一方、〈なりきよ〉が「てるかはがうざし」とかかわって謡われ
たものを見出せない。

(11)「あまみや・しねりや」と関係

〈むつき〉は、「あまみや・しねりや」(遠い昔)と深くかかわっ
ている。

一 しよりもり、大ききみや／首里もり、おれわちへ／

あちおそいしよ／せぢ、まさて、ちよわれ／

又 とよむ、きみ、とよみきや／ませねかて、おれわちへ／

又 あまみやから／すへの、きみ、やれは／

又 しねりやから／あいちへ、きみ、やれは／

又 さしふ、五ころに／みまふてす、おれたれ／

又 むつき、七ころに／かいなで、す、おれたれ／

又 大ききみや、御さうせ／てるかはは、のたて、／

(二〇八番)

このオモロでは、「あまみや・しねりや」時代から霊力豊かで、国
王の相手君(王の相手になる神女)である首里大君が〈さしふ・む
つき〉に「降りる」旨が謡われている。

一 きこゑ、せんきみや／すゑ、とまいて、おれわちへ／

あちおそいに／嶋か、のち、みおやせ／

又 とよむ、きみ、とよみきや／ませ、ねかて、おれわちへ／

又 あまみやから／すへの、きみ、やれは／

又 しねりやから／あいちへきみやれは／

又 さしふ、五ころに／みまふてす、おれたれ／

又 むつき、七ころに／かいなて、す、おれたれ／

又 大きみきや、御さうせ／てるかはは、のたてて／

(二二一番)

このオモロでも、「あまみや・しねりや」時代と深い関わりを持つ
精の君神女が〈さしふ・むつき〉に「降りる」旨が謡われている。

一 あかる、もちつきや／さしふ、よなれ／

きみきみきや、いのち／おきやかもいに、みおやせ／

又 きみの、もちつきや／さしふ、よつき、きみ／

又 あまみや、きみやれは／すへの、きみ、やれは／

又 しよりもり、おれわちへ／またまもり、おれわちへ／

又 あか、まふる、あんしおそい／

あか、かいなて、あちおそい／

又 おれらかす、みまふら／あすは、かす、みまふら／

又 あかるもちつきや／てだと、よきやて／ (六六四番)

このオモロでは、物事に精通している〈さしふ〉のもちづき神女は
「あまみや君」(昔からの古い伝統を持つ神女)であるという旨が謡
われている。

一 きみや、おにの、きみ／めつけ、しよわちへ／

かなしやす、みよわめ／

又 さしふ、いつゝ人／

又 あまの、かなしやす／

(一三九六番)

このオモロも〈さしふ〉を「あま」と関係づけているものである。
この「あま」は「あまみや」の「あま」と関係あるものと解される。

一方、〈なりきよ〉を「あまみや・しねりや」と関係づけて謡わ
れたオモロは見出せない。

2. 『おもしろさうし』での用法のまとめ

以上見てきた『おもしろさうし』における〈なりきよ〉〈むつき〉
の用法をまとめて表示すると、次頁のようになる。

この表から、次のことが読み取れる。

(1) 「降りる」に関していえば、〈なりきよ〉より〈むつき〉を対
象として降りる高級神女が多い。

(2) 〈なりきよ〉は「降ろす」「先立てる」「集め、揃える」「迎え
る」対象となる。これらの動作は他動的で、〈なりきよ〉は高級神
女や国王あるいは領主などの指示に従っていて、待遇上は〈むつき〉
より低かったものと解される。

神女〈なりきよ〉〈むつき〉の素性

事項	主体	対象	事項	主体	対象
(1) 「降りる」	きみかなし せんきみ あおりやへ きみかなし せんきみ きこゑ大きみ おしかけ しより大きみ さすかさ	●	(6) 「珍らがる、 掻い撫でる」	きこゑ大きみ しより大きみ せんきみ きみのつんし	●
(2) 「降ろす」	きこゑ大きみ たうの大や ナシ	●	(7) 「助ける」	もゝとふみあかり ナシ	●
(3) 「先立てる」	きこゑ大きみ きみかなし ナシ	●	(8) 「おしかかる」	わらいきよ ナシ	●
(4) 「集め、揃える」	きこゑ大きみ ナシ	●	(9) 「ねがう、このむ」	きこゑ大きみ ナシ	●
(5) 「迎える」	あんしおそい ナシ	●	(10) 「てるかはがう ざし」と関係	有り ナシ	●
		×	(11) 「あまみや・し ねりや」と関係	有り ナシ	●

(3) 〈むつき〉は聞得大君以下高級神女が「珍らがる、掻い撫でる」(愛でる、慈しむ)対象であり、「助ける」「おしかかる」対象である。また、「ねがう、このむ」(望む、目論む)かたちで降りる対象でもある。さらに、「てるかはがうざし」(日神の御命令)と深くかかわっており、「あまみや・しねりや」時代からの由緒正しい神女として語られている。これからすると、首里王朝の体制の中では〈なりきよ〉より重く扱われたのではなからうから解される。

三 「なる」と「もの」

1. 〈なりきよ〉〈むつき〉の対応語

〈なりきよ〉〈むつき〉は、既に見てきたように『沖繩古語大辞典』で「成り子」「物憑き」に対応するものとみている。「なりこ」↓「なりきよ」、「ものつき」↓「むんつき」↓「むつき」の変化は、音韻論的にも支持されるので、そのみかたは妥当といえよう。

さて、〈なりきよ〉〈むつき〉の素性をよりよく把握するために、いわゆる国語の「成る」「もの」、琉球方言の「ニン」(成る)である(「ムン」もの)の表現の面からも考えてみる必要がある。

2. 国語の「成る」「もの」

国語の「なり」「もの」について、『岩波古語辞典』では、次のように記している。

植物の実が「なる」ように時が自然に経過してゆくうちに、いつの間にか、状態・事態が推移して、ある別の状態・事態が現われ出る意。

荒木一九八五では、「なる」の用法として認められる「自発」「可能」「尊敬」の三者の関係について考察し、その中核的意味を「自発」と見ている。たとえば、「なる」には、

自発：親無しに汝なりけめや(紀・巻二二)。実が成る。

可能：そのようなことはなるまいぞ。ならぬ堪忍するが堪忍。

尊敬：お書きになる。ご覧になる

のような用法があるが、それらの用法は「自発」あるいは「自然展開」を中核とし、日本人は自然展開的行為を良しとする価値観を持っているとみている。他に、「れる、られる」や「出来る」などの言葉も通して同様の価値観をみている。

大野一九七八などでも、自発・可能・受身・尊敬の用法を持つ「る、らる」について考察し、そのうち自発が根本であるというみかたが既に示されているが、「なる」の用法においても自発が根本であるとするみかたは妥当であろう。自発というのは、主体の意志とは関係なく自然の成り行きとしてある事態または状態が成立することをいう。

次に、「もの」について、『岩波古語辞典』では、次のように記している。

形があつて手に触れることのできる物体をはじめとして、広く出来事一般まで、人間が対象として感知・認識しうるものすべて。コトが時間の経過とともに進行する行為をいうのが原義であるに對して、モノは推移變動の觀念を含まない。むしろ、變動のない対象の意から転じて、既定の事実、避けがたいさだめ、不変の慣習・法則の意を表す。また、恐怖の対象や、口に直接のぼせることをはばかる事柄などを個々に直接に指すことを避けて、漠然と一般的存在として把握し表現するのに広く用いられた。人間をモノと表現するのは、対象となる人間をヒト(人)以下の一つの物体として蔑視した場合から始まっている。

荒木一九八五でも「もの」について「こと」と對置しながら考察している。それによれば、「もの」は「人間の存在を貫いている恒常不変の原理(さだめ)、さらには超自然的存在物(聖・非聖)、あるいは時間的に恒常不変のものとしてとらえることのできる具象物、までを広く指示することば」(八六頁)となっている。「こと」との比較では、「日本人は、その言語活動において原理的・恒常的な客観世界と、非原理的・可變的・一回的なそれとを厳しく区別しながら、前者をへものく、後者をへこと」という言葉によって表現してきた」と述べている。

これらの論を踏まえるならば、「こと」は「時間の経過とともに展開・進行する出来事・事柄など」をいい、「もの」は「推移變動

の觀念を含まない、時間的に普遍の存在」をいうとみることができよう。

3. 琉球方言におけるナイン(なる)、ムン(もの)

琉球方言のナイン [nain] には「自発」「移動」「可能」の用法がある。沖縄本部町瀬底方言に例を取って示す。

「自発」の例

ナイヌ ナイン [nainu nain] (実がなる)

うフツチュ ナイン [ʔuɸuttʃu nain] (大人になる)

ナチ ナイン [natʃi nain] (夏になる)

「移動」の例

あマンガティ ナレー [ʔamagaɰati nare] (あそこへ移れ)

スバンガティ ナレー [subagaɰati nare] (片側へ移れ)

あマナイ フマナイ スン [ʔamanai ɸumanai sun] (あそこへ移ったりここへ移ったりする)

「可能」の例

ワীগン ナイン [wa:gan nain] (私にもできる)

タルーガ ナイガ [taru:ga naiga] (誰ができるのか)

あんチャ ナラン [ʔantʃija naran] (それではいけない。それ

ではできない)

「実がなる」「大人になる」「夏になる」のは、主体の意志とは関係

なく、自ずとそうなることで、まさに「自発」といえよう。「自発」というのは、自然の成り行きとしてある事態または状態が新たに成立することを意味する。そこからまた「移動」の意味も出てくる。

新たな事態・状態の成立は移動をともなってはじめてありうる。このような人為的でない、自ずと湧き出てくるような動き・結果が事柄を実現する力となるとみて「可能」の意も出てくる。こうみても、琉球方言のナイン(なる)の基本的意味も、国語の場合と同様「自発」であることがわかる。ただし、琉球方言のナインには「尊敬」の意味の用法はなく、また国語の「なる」には「移動」の意味の用法は希薄であるという違いがある。

琉球方言のムヌ[munu] (もの)、ムン[mun] (もの)の用法については仲宗根一九八三に詳しいが、ここでは瀬底方言を例にとりて示すと、次のようになる。

「物・物体」

イルンナ ムン ホーユン [ʔirunna muu hojuu] (いろいろなものを買う)

「者・人」

あんネーヌ ムントウヤ ナラン [ʔanne:nu muttuja naran] (あんなものとはつきあえない)

「ことば」

ムヌン ヤン [munuu ʔjan] (ものも言わない。話もしない)

「食物」

ムヌー ケーン [munu: ke:ŋ] (ものを食う。食物を食べる)

「魔物・悪霊」

ムンネー マヤサリーン [munne: majasari:ŋ] (魔物に惑わされる)

「道理・思慮分別」

ムヌー うマーン [munu: ʔuma:ŋ] (物思わぬ。思慮分別がない)

ムヌー ワカラン [munu: wakaran] (ものがわからない。道理をわきまえない)

ありーガ いケー イー ムンヤサ [ʔari:ga ʔike: jimujasa] (彼が行けば良いことだ。彼が行けば道理にあっていて良いことだ)

以上の他に、ムンにはまた接続助詞としての用法もある。これについては、文献資料を中心として高橋一九九一に詳しい論述があるが、瀬底方言では、先行内容を道理にあった当然のことと認定し、それにもかかわらず逆の結果となる後行内容に多少の不平・不満をこめつつ結びつける働きをする。

ユー キバイヌムン キバランリ ユンナ [ju: kibainumun kibaranri ʔju:ŋna] (よく頑張るのに頑張らないというのか)
クトゥ [kutu] (こ)

カワタン クトウヤ ネーン [kawatan kutuja ne:ra] (変わったことではない)

のような名詞的用法の他に、接続助詞としての用法もある。

チブルヌ ヤムクトウ クーヤ イカン [ʧɯburunu jamkutu ku:ja ʔikan] (頭が痛いから今日には行かない)

この用法からもわかるように、クトウは先行内容を原因・理由として、後行内容に結びつける。後行内容は先行内容の条件に対して順当な結果である場合が多い。少なくとも逆の結果ではない。

以上のように、琉球方言のムン(もの)にも、「魔物・悪霊」「道理・思慮分別」の意があることがわかる。マジムン [madʒimun] (幽霊・魔物)、ムンマユイ [mummaju:] (もの迷い)。悪霊にとりつかれて迷うこと)、ムヌシリ [munu:ʃi:] (もの知り。道理に通じている人。易者。巫女)、ムンナラシ [munna:ra:ʃi:] (道理を習わせること)、ムヌカンゲー [munukange:] (もの考え。来し方行く末をあれこれ思い悩むこと)、ムヌウシ [munu:ʔumi:] (物思い。あるべき姿・道理を考え思い沈むこと) などの言葉があることからその意味がうかがえる。

四 「なりきよ」「むつき」の素性

「なりきよ」の「なり(成り)」、琉球方言のナイン(成る)の基本的意味が「自発」であるならば、「なりきよ(成り子)」は、主体

の意志とは関係なく自ずとそうなりうる人、すなわち自ずと神になりうる素質を持った人ということになる。例えば、次のオモロをみてみよう。

一 きこゑ、あおりやへか／いけな、なりかわて／

しよりもり、おりわちへ／かくら、せち／

あんしおそいに、みおやせ／

又 とよむ、あおりやへや／なりきよ、おれかわて／

またまもり、おれわちへ／ (二六九番)

ここでは、〈あおりやへ〉神女が「いけなに成り変わり、なりきよに降り変わる」と謡われている。これは〈あおりやへ〉神女が天降りして〈いけな・なりきよ〉に変化するのではなく、〈いけな・なりきよ〉が〈あおりやへ〉神女から霊力を得て自ずと神に成り変わるのである。〈いけな・なりきよ〉は自ずから神になりうる能力を持った人だからである。神霊が依り憑いていないときは普通の人であった可能性が高い。『沖縄古語大辞典』の「神が依り憑き、神に成り変わった人。現世の人という意もある」という解説は、その点で妥当である。その〈いけな・なりきよ〉は、その能力のゆえに首里王朝の神女体制に組み込まれてはいるが、待遇的には〈むつき〉より低かったものと解される。これは「降ろす」「先立てる」「集め、揃える」など、高級神女や国王などの指示で動かされる対象として遇されているところからもわかる。久高島のナンチュ(神女)もそ

の系統の神女である。

一方、〈むつき〉は「ものつき」の変化したものである。「もの」または琉球方言のムン(もの)は「神霊」を意味し、「ものつき」は「神霊の憑依する人」という意味である。〈むつき〉は〈なりきよ〉のように自ずと神に成り変わる能力をもった人(それもいたかもしれない)というよりは、聞得大君以下の高級神女が「ねがう、このむ」(望む、目論む)かたちで降りる対象なのである。それなるがゆえに、高級神女によって「珍らがる、掻い撫でる」(愛でる、慈しむ)対象ともなっているのである。「てるかはがうざし」(日神の御命令)、「あまみや・しねりや」(遠い昔)時代からの由緒正しい神女として謡われているところからすれば、首里王朝の神女体制のなかでは下級神女とはいえ比較的重く遇された神女だったと解される。

参考文献

荒木 博之 一九八五(昭六〇)『やまとことばの人類学』朝日新聞社

聞社

大野 晋他 一九七四(昭四九)『岩波古語辞典』岩波書店

大野 晋 一九七八(昭五三)『日本語の文法を考える』岩波新書

沖繩古語大辞典編集委員会編 一九九五(平七)『沖繩古語大辞典』

角川書店

小山 和行 一九九二(平四)

『おもろさうし』にみるオボツ神女集団―〈さしふ〉〈成り子〉を中心に―(沖繩文化研究一九)

法政大学沖繩文化研究所

高橋 俊三 一九九一(平三)

『おもろさうしの国語学的研究』武蔵野書院

玉城 政美 一九九一(平三)

『南島歌謡論』砂子屋書房

仲宗根政善 一九八三(昭五八)

『沖繩今帰仁方言辞典』角川書店

外間 守善 一九九三(平五)

『おもろさうし』(新編)語釈』角川書店

拙著 一九九四(平六)

『琉球方言助詞と表現の研究』武蔵野書院